

## 三重、岐阜、和歌山の天理教

伝道史上、三重、岐阜、和歌山の3県をまとめて記述する意味は小さい。しかし連載の都合上、3県を一つにした。

3県への伝道は奈良、滋賀、大阪からなされた。三重県にはおやしきを始め奈良県敷島、郡山、中和および滋賀県甲賀系統と大阪の北系統から。岐阜県へは滋賀県の甲賀系統から。和歌山県へはおやしきおよび奈良県敷島、桜井系統から。さらに大阪の芦津、此花系統などである。

各県ごとに詳しく述べてみよう。まず三重県から。旧国名では三重県の大半は伊勢(国)で、他は伊賀、志摩、紀伊(ほとんどが和歌山県だが一部が三重県になっている)である。直線距離180キロにも及ぶ縦長(横長?)の県域をもち、文化、経済において一つではない。伝道経路も地域によって特徴がある。

『稿本天理教教祖伝』に明治3年から5年頃、伊賀地方に道が伝わったと記される(107頁)。しかしその信仰は受け継がれなかったようで、現在の教会とは無関係だ。一説には教祖の妹西田くわの末娘が名張に嫁ぎ、布教していたと言う。

明治3～5年頃の伝播を除いても三重県で一番早い信仰は伊賀であろう。明治19年、天龍講(後の郡山大教会)の萬田平治郎は上野町を訪れ、仕事仲間におたすけをした。その後萬田の三男萬吉が熱心に布教し上野に講が結ばれた。これが島ヶ原大教会の始まりである。島ヶ原の関係教会は伊賀地方を中心に三重県内に17カ所あり、関東、東北にも伝道線を伸ばしている。

明治20年、大阪天地組(後の北大教会)布教師、中川徳蔵は北海道布教に出かける前に郷里である名張に寄ったところ、おたすけを求める人が押し寄せそのまま名張で布教することになった。名張分教会の始まりである。関係教会24のうち2カ所を除いて全て三重県にある。

滋賀県から鈴鹿山脈を越えると三重県北勢地方である。近江商人は鈴鹿峠や八風街道を越え三重県と交易した。こうした経済的流通の中に甲賀や日野の布教師が入り三重県北部に広まった。同じく甲賀系蒲生大教会の教会が南勢地方に多いのも蒲生の信者が商用で訪れることの多い現伊勢市に布教したのが始まりで、勢山分教会となった。

中勢、南勢地方はいずれも奈良県からの伝道で東海、津、松阪の各大教会ができた。

明治21年、奈良県笠間村の加見兵四郎は乞われて一志郡へおたすけに出た。飯南郡、多気郡、度会郡にも布教し明治26年、度会郡滝原村にて東海支教会(現大教会)を設立した。加見は幼少の頃より辛酸をなめた苦勞人だったが明治6年教祖に助けられ入信。明治18年心勇組に加わり、支教会設立時は城島(現敷島)分教会に所属していた。三重県内に46カ所の教会があるがほとんど中勢、南勢である。

天龍講池田組(現中和大教会)の信仰者安田治三郎は明治22年、津の川本由蔵の次男を助けた。信仰を始めた川本は熱心に布教した。同じ頃、同じ地域で斯道会(現河原町大教会)の布教師も熱心におたすけをしており、教会設立に際し話し合いの上、所属を明確にし天龍講の人たちで明治25年、津支教会(現大教会)が設立された。津大教会は現在三重県内に37カ所の教会を有し、その所在地は津より北に多い。

奈良県御杖村の心勇組信者笹尾辰吉は明治22年一志郡や飯南郡で布教し信者ができた。おぢばに参拝した信者たちは婦路、城島分教会に立ち寄り、城島分教会では役員を派遣し指導した。現北山分教会の人たちも交替で布教応援し、松阪近辺の敷島系信者を一つにまとめ、明治26年松阪支教会(現大教会)が設立された。現在、松阪大教会は中勢、南勢を中心に三重県内に42カ所の教会を有している。

志摩地方は志摩半島の突端部のみで広くない。ここは圧倒的に南紀大教会の教会が多い。志摩と紀伊(三重県部分)の伝道を熊野に始まった南紀大教会の発端から記す。

明治20年、現熊野市に住む下村謙三郎は食道癌の治療に京都へ赴いた。途中、売薬人から「大和の天理さん」の噂を聞き、京都でも偶然(神の導き)斯道会講元深谷源次郎に会い、大和の神様にお参りをと奨められた。下村は一旦熊野へ帰ったが「大和の神様」が忘れられず、翌年弟と共におぢばへ参詣した。詳しく教理を聞きおさづけを受けた

下村は郷里で講を結び、近郷をくまなく布教して歩いた。不思議に癌は快方に向かったと言う。仏教者の厳しい妨害に屈せず、明治25年熊野地方の中心地である本木にて南紀支教会(現大教会)を設立した。現在、紀伊と志摩を中心に三重県内に51カ所の教会がある。

岐阜県の話にうつる。岐阜県はほとんどが滋賀県からの伝道で、且つその大半が甲賀系統で占められる。滋賀県から三重県北勢への伝道は既に述べた通りであるが、そこから養老山地を越えると岐阜県に入る。この3県境辺りはお茶などの取引により双方向の行き来があった。明治20年代、30年代には天理教信者も商売と布教から往来し、その結果が現在の甲賀系岐美、東濃、日野、甲賀、中野の関係教会になった。

甲賀大教会発祥地から伸び広まった道は近江商人の村である大清水から湖東平野一帯に伝わり、さらに山を越え、三重県、岐阜県に伝わる。岐阜県海津郡に入った信仰は口から口へと安八郡にも伝わる。丁度この頃(明治24年)起こった濃尾地震での布教師の「不思議なすけ」を見た人々が信仰を始め、明治27年石原政治を会長に岐美支教会(現大教会)が設立された。岐美は県内に100カ所近くの教会があり岐阜で最も多い。

岐美の信仰のきっかけとなった酒井国三郎は明治26年、加茂郡川辺村に布教した。酒井の説く教えに川辺村長の勝村伴次郎は心をうたれ、信仰を決心する。村長の入信で村人の多くが信仰に入った。同じ頃、以前から川辺付近を布教していた中野系、三重県桑名の布教師が大勢おたすけにきた。川辺ほかで結ばれた講を統合し、明治31年東濃出張所(現大教会)が設立された。現在、東濃大教会の教会は岐阜県内に31カ所。岐美に次いで多い。

岐阜県は岐美、東濃以外も甲賀系が多く、日野25、甲賀14、中野12の教会がある。なお、愛知大教会の教会も16カ所ある。

さて、和歌山県には教会が419カ所ある(立教176年6月)。人口比教会数では奈良県に次いで多い。県人口約100万人に400を超える教会がある事は和歌山県の大きな特徴である。

和歌山と奈良との県境には険しい山地が連なり、通行に便利ではない。奈良県五條から橋本へ入る道と紀伊山地の山々を抜けて新宮へ出る道くらいだ。したがって天理教流入経路は複雑ではない。南海と中紀両大教会への伝道と敷島系紀陽大教会、名草分教会への伝道結果が全和歌山の64%を占めている。

南海大教会は三重県側の紀伊地方に始まった。現御浜町の山田作治郎は明治20年胸の病を養生するため畑林為七同道で大阪へ向かった。しかしかねて耳にしていた教祖のことが忘れられずおぢばに参拝した。教理を拝聴、おさづけをうけると不治の病と聞かされていたものが2日間で助かったという。

帰村した二人は早速おたすけを開始し、同年のうちに「正明講」を結んだ。二人のおたすけによって三重、和歌山の県境付近に信仰が広まり、明治24年和歌山県新宮町に南海支教会(現大教会)が設置され山田が初代会長についた。なお、畑林は南海の2代会長と中紀支教会(現大教会)初代会長となる。現在和歌山県内に南海関係の教会が109カ所、中紀関係が55カ所あり、合わせると和歌山の約40%にのぼる。

紀陽大教会は、明治21年、前田友千代、藤楠兄弟が実姉を心勇組の常極仁右衛門に助けられたことに始まる。前田兄弟は居村の那賀郡中貴志村で布教し中西増蔵らが入信した。心勇組の指導のもと那賀郡、有田郡、和歌山市など紀ノ川および貴志川流域に活発な伝道を展開し、明治25年紀陽支教会(現大教会)が現岩出市に設置された。紀陽大教会の教会は現在も紀ノ川、貴志川流域に多くその約8割(55カ所)が和歌山県内にある。

紀陽の発端を作った常極は明治19年郷里の榛原で加見兵四郎に肺結核を助けられ入信した人。翌年和歌山市でおたすけ活動を始め、明治25年名草支教会(現分教会)を設置し初代会長に就いた。紀陽の前田兄弟の姉を助けたのは常極が和歌山でおたすけを始めて2年目のことだった。名草分教会は現在41カ所の関係教会があるが、そのうち30カ所が和歌山県にある。